

障害者に対する時代の変化

前回からの続きをご紹介します。

1 月末、E ラーニング 3 回目の教材が届きました。総合タイトル” Diversity and Inclusion”。「多様性と包含」といったような意味でしょうか。大事なことは「違いを知ること」「理解をすること」で「そういうこともあるんだ」と受け入れる。頭ごなしに否定しない、性別による判断に注意すること。世界にはいろんな文化や習慣があること等々。

例えばイスラム教の豚肉タブーの「ハラール」。ピースサインもギリシャでは昔犯罪者に 2 本の指で石を投げたことから不快な意味にとられること。また仏教国のタイでは子どもの頭を撫でないこと（頭の中に仏様がいるから）などと。

今回は特に身体障害者への対応の心構えや具体的方法を詳しく案内しています。

「サポートの心構えと方法」では「気づく力」：気を配る。「行動力」：笑顔で声をかける。

「対話力」：双方のコミュニケーションが大事など。

例えば車椅子では：

- ① 声をかけ希望するサポート方法を聞く
- ② 必ず声をかけてから動かす
- ③ 小さい段差でもひっくりかる危険がある
- ④ 下り坂は後ろ向きに下りていく、など



視覚障害者には：①斜め前に立って声をかける ②どちら側に立ったらよいか聞く ③腕を貸す、体のどこかをつかんでもらう ④体に触れない、引っ張ったり押したりしない ⑤横半歩前を歩く ⑥階段は「のぼります」「くだります」と声をかけ階段の高さを伝える ⑦トイレの概要を説明し外で待つ ⑧椅子に座るとき椅子の形などを話す・・・など。

そのほか、聴覚障害、知的障害、精神障害などについてもサポートのための具体的な案内や注意事項が説明されています。

読み進んでいくと「なるほどそうだ」と思い当たること学ぶこと多々。それにしても、パラリンピックや長い間の関係者の啓発運動が実を結び始めて障害者に対する状況の変化が出てきていることは喜ばしいことです。実は私自身も、大学時代に足の悪い友人がいて彼が「保障よりも（働く）チャンスを」と訴えて「日本アビリティーズ協会」を立ち上げ日夜、奮闘している姿に感銘してできる応援をしてきた次第です。

障害者の話になると、私は 70 年近く前の子供のころのことをよく思い出します。当時は障害者自身も障害者を抱える家族も大変な心理的負担を抱えていました。道路を歩いていけばジロジロと見られた。そこで家族はできる限り障害者を外に出さないようにした。いわゆる“座敷牢”という言葉まであったのです。



現在は街の道路でもバス停でも電車の駅の改札でも頻りに車椅子を見かけます。バスも電車も車椅子が乗り込めるように“乗車板”のようなものまで用意して障害者の動きを助けています。車椅子の国会議員が当選し、国会議事堂の中の改善までされるようになった。オリンピック、パラリンピックに限らず、行政と市民の意識の変化に大きな時代の流れを感じるところです。